http://alce.jp/journal/ 第22巻（2024）pp. 273 - 285 ISSN：2188-9600

Studies of Language and Cultural Education SLCE 言語文化教育研究 発行・編集 言語文化教育研究学会 ALCE Association for Language and Cultural Education

フォーラム

生成AI時代の言語文化教育を考える

新たなアプローチと課題の模索

住田 哲郎*（京都精華大学）　山中 司（立命館大学）　牛窪 隆太（東洋大学）

概要

本稿は，2024年2月に開催された大学コンソーシアム京都の第29回FDフォーラムの第5分科会「ことばの教育はいかに変わる“べき”か」における議論を概観し，言語文化教育の今後の方向性と課題について考究するものである。言語文化教育は異文化理解とグローバルな視点を育成するために重要であるが，生成AIの進化により教育手法が大きく変わりつつある。例えば，AI技術による自動翻訳や言語生成は，従来の授業形式に依存せずに個別にカスタマイズされた教育を実現している。分科会では，英語教育を専門とする研究者と日本語教育を専門とする指定討論者が生成AI技術が提供する教育ツールの可能性とリスクについて討論を行った。その上で一般参加者を交えた質疑応答では，評価，教員の役割，AIツール使用の影響など，多角的な観点から意見交換が行われた。本稿では，まず当日の議論をリライトしたものを記録として示す。そして，二名の登壇者（山中司，牛窪隆太）とコーディネーター（住田哲郎）それぞれがフォーラムの開催3か月後に行なったふりかえりを記述する。最後にそれらを踏まえて，コーディネーターが全体を総括することで，言語文化教育への生成AIの導入をめぐる論点を課題として示す。

キーワード：教師の役割，自律学習，教育環境，学習ツール，評価

Copyright © 2024 by Association for Language and Cultural Education

1. 本稿の問題意識

生成AI技術の進化が急速に進む現代において，高等教育における言語文化教育の重要性とその変革について考察することが不可欠となっている。本稿は，大学コンソーシアム京都の第29回FDフォーラム（2024年2月23～24日開催）の第5分科会「ことばの教育はいかに変わる“べき”か」における議論（山中ほか，2024）を概観し，その中で示された内容をもとに今後の言語文化教育の方向性と課題について述べるものである。

言語文化教育は，単なる言語の習得を超えて，異なる文化を理解し，グローバルな視点を持つ人材を育成するために重要な役割を果たす。しかし，生成AI技術の進化により，言語学習の手法やアプローチは大きく変わりつつある。例えば，AIによる自動翻

* Eメール：tetsurosumida@gmail.com

訳や言語生成の技術は，従来の授業形式に依存せずに個別学習を可能にし，学生の学習ペースやニーズに応じたカスタマイズされた教育が実現可能となっている。

本稿で取り上げる分科会は，生成AI技術がもたらす言語文化教育の新たな可能性と，それに伴う課題について理解を深めるとともに，未来の教育の方向性を模索することを目的として開催されたものである。詳細は後述するが，生成AIの進化は，言語文化教育に革新をもたらす一方で，教員と学生が共に学び続ける姿勢が求められるものであるという。また，技術の進歩に対応した柔軟なカリキュラムの構築や，多様な学生のニーズに応じた支援体制の整備も不可欠であると考えられるだろう。今後，言語文化教育の発展に向けては，生成AI技術を適切に活用し，学生のグローバルな視点を育む教育環境の構築に努めることが求められる。

本稿では，2章で当該分科会の当日の講演と指定討論について，また，3章で分科会参加者と登壇者の間で交わされた質疑応答について紹介する。さらに，4章において登壇者とコーディネーターの後日談としてのふりかえりを提示し，最後に5章でそれらを総括しながら言語文化教育における今後の課題を示す。

2. 講演と指定討論

当該分科会では，英語教育に携わる専門家が講演者（山中司：以下，講演者と表記）として講演を行い，その後，日本語教育に携わる専門家が指定討論者（牛窪隆太：以下，討論者と表記）として登壇することで，現状の高等教育におけることばの教育の課題と，生成AI技術がもたらす可能性について議論を行なった。まず講演では，講演者から，生成AIが提供する新しい教育ツールが従来の教育法を補完し，学生の学習体験を豊かにする可能性がある一方で，AIに依存することのリスクが指摘された。AIと共存して自律的学習を促す教育を実現しつつ，特に文化的背景や文脈を理解するための人間的な要素をどのように保持していくかが重要であるという。それに対し，討論者は日本語教育実践者の立場から，AI技術が進化する一方で，日本語教育においては現場レベルでの教授法は，あまり変化していないのではないかと疑問を呈した。教育実践を変えるためには組織，信念に働きかける新たなアプローチが必要であり，また，「教育」から「学習」への視点の転換が必要であるという。その後，分科会の一般参加者を交え，評価の問題や教員からのネガティブな反応，AIツール使用の影響や生成AIの活用法における教師の役割などの観点からの議論と意見交換が行われた。次節ではまず，当該分科会の前半部にあたる講演と指定討論の内容について概観する。

2. 1. 講演：講演者による講演

大学における英語教育へのChatGPTの導入状況について，いくつかの大学では，比較的早期にChatGPTを取り入れ，新しい教育方法を模索してきた。この過程で，多くの知見が得られた一方，さまざまな問題にも直面している。大学教員は，ChatGPTの基礎知識，テスト・評価の形式，教育内容の範囲，そして学生に対する利用許容度などに関する悩みを抱えている。教育現場では新技術に対する保守的な姿勢が見られ，生成AIに対する評価がある程度，定まるまで使用を控えたいという考えが一般的な傾向であるようだ。しかし，評価が定まる頃には新たなテクノロジーが登場する可能性もあり，先駆的な取り組みが重要である。

次に，生成AIと英語教育の親和性について考えてみたい。生成AIが言語を媒介とするものであると考えると，得意分野は「言語」であると考えることができ，それを言語教育に活用しないのは非常に勿体

ないともいえる。ChatGPTが登場した当初，多くの学生がレポート作成に多用するのではないかと懸念されていたが，実際のところ，少なくとも現段階では大学生の多くはChatGPTを十分に活用していないことも確認されている。

その一方で，大学の外，特にビジネスの業界においては，ChatGPTが広く利用されている点は見逃せない。例えば，ビジネスマンの間ではTOEIC対策の問題作成や単語リストの作成，さらにはスピーキングの練習などに活用されているそうで，今後は大学業界にも徐々にこの流れが浸透してくると予想される。

そうなってくると，英語教員の存在意義についても今後は議論になると考えられる。生成AIの登場により，英語教員や教室の役割は再考されるはずである。もちろん英語教員は依然として必要であり，教室も重要な場であることに変わりはないが，その方向性，立場は今後，変わる可能性がある。

生成AIを利用することで，効率的に学習を進めることができ，自分の英語力を高めるツールとして非常に有効である点は否定できない。例えば，ChatGPTに「英検準二級レベルの英語にして」とプロンプトを入力すると，そのレベルに調整された出力が得られるなど，学習者のニーズに応じたサポートもすでに可能になっている。

学生が自分の言葉で話せるようになることが何よりも重要であると考え，その有効活用の一例として行なっているものに，英語プレゼンテーションの実践がある。この教育実践は，学生たちが8分間の英語プレゼンテーション（おそらく暗記が困難であると思われる）をクリアするために，ChatGPTを活用しつつ，ときには自分には難しすぎると思われる英語表現をダウングレードしながら自分が使える英語に直し，英語でプレゼンテーションを完成させるというものである。生成AIを使えば母語を活用できるというメリットがある。その他にも，日本語を母語とする学生であれば，日本語でプロンプトを書いて英語に翻訳することにとって，論文作成や他者との英語での意思疎通も容易になり，自身の生身の英語力に頼らずとも国際交流は進められるようになる。

一方で，当然のことながら問題点も存在する。生成AIの出力が，通り一辺倒であるかのように見えてしまうことや，出力されたものをただ受け取ることで，学生たちが学習において受け身になってしまう可能性もあり，教育現場での活用には，まだ多くの課題が残されている。

それでも，教育実践において生成ＡＩを活用しているのは，学生に取り組み甲斐のある課題を与えることで，自律的な学びが促進されると考えるためである。そのためには，学生たちが生成AIを活用して自分のオリジナルの成果をアウトプットし，教室内でそれが評価されることが重要である。このような教育アプローチは，今後のことばの学びの形を革新的に変えていく可能性があると考える。すでに指摘したように，ビジネス場面での使用状況を考えるのであれば，今後，生成AIとの共存は避けられない潮流であり，それを全く使わない教育というのは現実的ではない。むしろ，生成AIを効果的に活用し，学生の自律的な学びを支援することで，より豊かな教育環境が実現できると考えるべきなのではないか。生成AIを活用した言語教育は，その可能性を最大限に引き出すための模索を続けるべきであり，それが未来の学びを変える鍵となるだろう。

2．2．指定討論①：討論者による提題

講演を受け次に討論者が「生成AIは教育実践をどのように変えうるか：日本語教育からの問い」という題目で，日本語教育実践者の立場からの見解を述べた。以下にその概要を示す。

日本語教育の教授法の議論についての潮流を見てみると，古くは「問答法」から「直接法」への移行

を経て，近年では，ナラティブ，CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠），行動中心アプローチ，ICTの活用などが注目されるようになっている。現在の日本語教育研究においては教授法よりも教育環境のデザインが注目されるようになってはいるものの，実際に教師が教室で行なっていることを考えてみると，実際にはそれほど変わっておらず，教えるものを教師が提示し練習させ，それを評価するという場合も少なくないように思われる。つまり，時代のトレンドに合わせて様々な概念が提示され消費される一方で，授業において教師が行なっていることは，昔のままということもあるのではないだろうか。

個々の言語教師が教室活動を決定する際の要因について考えてみると，言語教師の持つ「知識」は「信念体系」と密接に関係していることが指摘されている（長嶺，2014）。また，プロフェッショナルの経験学習の質は，所属する組織の特性と個人の信念によって決まるという指摘もある（松尾，2006）。そのように考えると，教育機関において行われる教育実践を大きく変えるためには，組織の特性や個人の信念にアプローチする必要があるということになる。

次に，生成AIの役割について考えてみたい。生成AIは教育ツールなのか，学習ツールなのかという点である。教育ツールとして考えると，単純に言えば「教師による導入・基本練習・発展」という従来の教室活動の流れを効率化するものとして考えることができる。一方で，学習ツールとして考えると，自律学習を支えるものとして生成ＡＩの可能性は無限であり，教育の枠を超えてしまう。つまり，生成ＡＩが問題となる（教師が使用を制限したくなる）背景には，これら教育ツールと学習ツールとしての意義づけの間の齟齬があり，学習ツールとしての可能性が教育ツールとしての可能性を超えていることにあると考えられる。

このことは，言語教育と言語学習の序列を変えるものとなる。つまり，言語教師にとっては，言語教育が先にあり，言語学習はそれに従属するものと考えがちだが，この認識は生成AIの本格的な導入により反転するのではないか。つまり，学習者にとって先にあるのは言語学習であり，言語教育はそれに従属する形で，その効果を促進するものと位置付けることができる。そしてその反転により，最終的には，より高い教育効果が得られるという，発想の転換が必要であると考えられる。

さらに現場教師に求められる対応について考えてみると，まず狭義の対応として，生成AIに何ができるのかを知り，ツールとしての活用方法を考えることがある。その上で，広義の対応として「教育」から「学習」へと視点を移行させることで，改めて，教室という場を再考することが求められるだろう。総じて，生成AIの導入は教育実践に大きな変革をもたらす可能性があり，これまでの言語教育と言語学習の序列を刷新することも必要になると思われるが，重要なのは，教育者として新しい技術とどのように向き合い，どのように活用していくかを模索し続けることであり，そのためには，教師に不確実性への耐性がより強く求められるようになるのではないか。討論者として提起したい論点は以下である。

【教育実践について】

- 評価軸は，言語構造についての知識からシフトするようになるのか。
- 「説明・提示→練習→発展」という旧来のあり方は完全に変化するのか。
- 教室に集まることの意味（経験の意義）はどのように担保されるのか。

【教師の役割について】

- 文法説明の巧みさや誤用訂正は言語教育の中で中心的課題ではなくなるのか。
- 教師の役割（存在意義）はどのように変化するのか。

2. 3. 指定討論②

講演と論点の提起を踏まえ，討論者から講演者に対して2つの質問が投げかけられた。以下は，そのやり取りである。

【質問1（討論者）】

留学生指導の中でGoogle翻訳とかを使って出てきたスピーチのスクリプトの出力レベルが高くて驚くことがある。講演者の実践の中ではその辺をどう扱っているのか。

【回答1（講演者）】

機械翻訳やChatGPTが出てきたものを修正するのは，大学生レベルではかなり難しい。できるのはせいぜい単語を変える程度で，文の構造を変える修正はかなり難しいと思う。日本語を英語に訳し，さらにその英語を日本語に訳すという，いわゆるバックトランスレイト（back translate）をさせてみて，原文とどの程度一致しているかを確認するという方法はある。そのようなツールを使う中で，自分の中でルールが発生すると，使えるようになるだろう。ダウングレードは特に重要で，今後は自分が使えるレベルに落とすための教育も必要になるのではないだろうか。ただ，それをするためには一定の基礎力も必要かもしれない。

【質問2（討論者）】

ツールを使うことで，言語を飛び越えてコミュニケーションが取れるというのが興味深い。そうすると，コミュニケーションで大事なのは言語使用の経験ということなのか。

【回答2（講演者）】

キーワードは「経験」。どう経験させるかというのは非常に本質的な問いだと思う。若い学生はテクノロジーを使って話すことに抵抗がない。要するに「通じること」が大事で，彼らは割り切っている。自由社会でただで使えるものがあるにもかかわらず，彼らに「使うな」と言うのはやはり難しい。「コミュニケーションしたい」という気持ちが大事だと思う。とにかく達成させる，コミュニケーションとして成立させるという経験をさせながら，一方で「でも，この辺はちゃんとやっておこう」といったことをいかに担保するのか。そこを教員側がうまくコントロールできれば，これまでと違ったモチベーションの中で学習者は勉強できるのではないだろうか。今はそれが技術的に可能な時代。それを追求していくことはとても大事なことで，ご発表にあった「言語学習が先にあって言語教育はそれを促進するという発想の転換が大事」という話で考えていくと，教育はもっと学習者を巻き込めるようになるのではないかと思う。

3. 質疑応答

分科会では次に，一般参加者からの質問とそれに対する登壇者（講演者，討論者）の回答があった。質疑応答の概要を以下に示す。

3. 1. 質問①：評価の設定について

【質問】

お二人ともコミュニケーションをさせる中で，学習者がそれぞれの意思，考えを「ことば」にする，プレゼンやグループワークをさせるというお話をされていたが，難しいと感じるのは，評価をどのように設定したらいいのかという問題である。特に公平性の観点から，具体的にどうされているのかを教えていただきたい。

【回答（講演者）】

評価の話は本質的で難しい問題。生成AIが出力したものをそのまま評価するというのは，生成AIを評価していることになるので，それは違う。その意味

でTOEICやTOEFLは今後もなくならないと思う。その人の生身の英語力を測るというのはそれはそれでいい。自分自身の生身の英語力を知るというのはとても重要なことだと思う。

要は評価の価値観を変える必要があると思っている。点数が高いから良い，低いからダメというのではなく，適切なダウングレードのために自身の現状を診断的に知る。「情報としての価値」に目を向け，評価に利用できるようになることが本当は理想である。そうなれば，これまでのテストもより有益なものになると思う。

【回答（討論者）】

アセスメント（assessment）とエバリュエーション（evaluation）は分けて考えるべきだという話を思い出した。成績と評価は別に考えた方が良いのではないかという話。おっしゃる通り，おそらく定性的評価にはなるのだろうと思う。自分は大学でビジネス日本語を担当している。ビジネス日本語にはBJTビジネス日本語能力テストという資格試験があるのだが，授業時にその資格試験については，それはそれで，各自自分で勉強して一定のスコアを取ってくるよう伝えている。ただし，その勉強のためのテキストはこちらで準備し，英語と中国語の翻訳をつけることで自学できる体制を作っている。言語知識はそちらで勉強し，教室の中では別のことをやる形になるわけだが，それらをどう組み合わせるか，そしてそこに生成AIをどのように組み合わせていくかというのが，今後の私の課題になる。

3. 2. 質問②：教員のネガティブな反応について

【質問】

学校の先生たちはなぜ生成AIを使うことを躊躇しているのか，お伺いしたい。

【回答（講演者）】

生成AIの教育利用に関しては，学生が自力で力を伸ばせるのか，単にズルをしているだけではないかという懸念が強い。実際に，ツールを利用して簡単に課題を済ませる学生がいることは否定できない。多くの教員は，自身の研究や教材作成には生成AIを有効活用しているが，教育目的での使用には慎重である。その理由として，生成AIが学生の能力を本当に向上させるかという疑問があり，確信を持てないために導入を躊躇しているのだと思う。それでも，学生の間で生成AIの使用は広がっており，無視し続けるのは困難な状況になってきている。反対意見は減少しているものの，具体的な導入方法が不明なため，多くの教員が様子見をしている状態なのではないだろうか。しかし，状況は徐々に変わりつつあり，生成AIを使い始める教員や，勉強会で情報交換を行う教員が増えている。もし，教育的に有用なアプリケーションや，すぐに答えを出さないなどの工夫が施された生成AIが開発されれば，その利用は一気に進む可能性がある。教員としては，このようなツールの教育的利用方法を模索し続けたいと考えているが，その効果を実証するのは難しく時間がかかるため，導入には慎重にならざるを得ない。このような現状が，生成AIの教育的利用に対する教員の姿勢を形作っているのだと思われる。

3. 3. 質問③：生成AIツールの使用による影響について

【質問】

学生たちが英語を話すことが難しいという現状において，ChatGPTを使えばすぐに「良い」英語を出してくれるが，そのアウトプットは，本当の実力ではなく偽りの力と言えるのではないだろうか。とはいえ，個人的には日本の学生の英語力はそれほど低くはないのではないかと思っている。もちろん文法等の難しさはあるにせよ，文法以外の，例えば人前で話す，間違えたら笑われるかもしれないといった

文化的なところにも難しさがあるのではないかと思う。そうすると，ChatGPTを使えば使うほど内向的になり，「できればいい」といった感覚が蔓延すると，例えば国際学会の発表要旨はちゃんと書けても，議論ができない学生が増えてしまうのではないかと危惧するが，どう思われるか。

【回答（講演者）】

非常に本質的な話だと思う。いわゆる完璧主義的な学生に，海外でも行ってみたらと言うと，「いや，ちょっと，3ヶ月くらい待ってください」「もう少し文法が完璧になってからやらせてください」となってしまう。結局，いつ完璧になるんだという話で，そういったマインドのところで能力を貶めてしまっているところはあると思う。おっしゃる通り，マインドを変えていかなければならない。発想を変えて，出ていけばいい。教育のあり方，つまり，基礎が積み上がってからでなければデビューしてはいけない，ある程度の実力がつくまではやってはいけない，といった教育のあり方を続けている限り状況は変わらないと思う。「（理論的には）生成AIを使えば，即国際デビューできる」環境にあるにもかかわらず，「いや，まだ自分はやっちゃいけないんだ」と勝手に自分で自分に制限を加えるような文化的な価値観は，まさに教育が変えていかなければならない重要なポイントかと思う。そこが変わっていかなければ，逆に日本人の自己肯定感の低さをますます悪化させてしまうことになりかねない。ちなみにChatGPTは文化領域には一切タッチできない。ChatGPTは，言語の交換は得意だが，そこにある文化差を理解して交換することはできない。その点は我々教員が介入していけるところではないかと思うし，変えていけるところなのかなとも思う。なので，実は「教える（teaching）」よりも，そういうところに我々教員はフォーカスしていった方が，実は最終的な効率は上がるのかもしれない。

3．4．質問④：教師の役割について

【質問】

生成AIを活用しない手はないこと，言語教育の現場における教師の役割は，教え方から学びのデザインや学習の補助，メンタリングにシフトしていく可能性があること，教室の意義も変えていかなければならないことも理解できた。しかし，テクノロジーの発展を目の当たりにしていつも気になることは，「人間は動物だ」ということである。自律学習には学習者のモチベーションや熱意が必要だと思う。背中を押さなくても自分で学習できる人は，どういった環境でも学習する。一方，私のような怠け者は，やはり教師というリーダーがいてほしいと感じてしまうものだと思う。このような考えについて，生成AIを活用している教員は，現在どのように考えているのか。

【回答（講演者）】

YouTubeには英語学習のコンテンツがいくらでもある。あれらを聴けば英語は上達するはずだが，実際どれだけの日本人がしゃべれるようになったかというと，それほど多くはないと思われる。つまり，夢のようなコンテンツがあってもそれをちゃんとデザインしてちゃんと導いてくれる場がなければ，人は勉強しない。そういう意味では，ご指摘のとおり教師は必要である。学習者に対して適切に導いたり，何のためにやってるのかを問いただす，あるいは，いい意味で焦らせてくれたり，お尻を叩いてくれたりというのは，必ず必要で，生成AIをうまく使いこなせるように導いてくれる教師の存在は不可欠だと思う。その意味でも，教えるというよりこちらの方に特化していかざるを得ないと思う。それから，我々教師は表現者としてモデルになることができる。「私はこうやっている」。だからある意味「先輩」に近いのかもしれない。一つのサンプルでしかないかもしれないが，モチベーションであったり，

教室のデザイン，友達や仲間との学び，いい意味での緊張感をいかに教室内でメタ的にデザインできるか，おそらくそういったところに特化していけば，我々教師は十分生き残っていけるはずだ。そういう意味では教師がいなければ，どんなに夢のようなツールが出てきても勉強はできないのではないだろうか。学習をちゃんとデザインしていく教師は引き続き大事になる。むしろ教師になりたい人は，学生のために「こんなことをやりたい」と思ったりしていると思うので，そういう意味では本来もっとやりたかったこと，本当の意味での「教育」に集中できるはずで，むしろいいことなのではないかと思う。

【回答（討論者）】

「導く」というお話があったので，私は逆に「制限しない」という観点からお話ししたい。交換留学生の日本語初学者を対象とした授業に，日本人学生にボランティアで来てもらい，話し合ってもらうという活動をしているのだが，以前は「皆さんの英語の勉強の場ではないので，日本語で話してください」と伝えていた。しかし，最近はそのことに違和感を覚えるようになり，「英語を喋ってもいいので，どんどんコミュニケーションの相手になってください」と伝えるようにしている。そうすると，来日間もない留学生たちが，まだ90分しか勉強していないのに，一生懸命日本語を話そうとしている姿を見て，日本人の学生も「あ，このレベルで喋っていいんだ。だったら，私の英語はもっといける」という感じで，積極的に英語や日本語でコミュニケーションをとるようになる。そういう意味では，何かを制限するのではなく，「何を使ってもいい」としてしまうのも方法として可能性があると感じている。

3. 5. 質問⑤：生成AIの活用法について

【質問】

学習サポートにおいて，いかに優れたテクノロジーを使ったツールが使用可能になったとしても，「英語コミュニケーション力」を向上させることを目的とすると，学習者のモチベーションと継続性という点が重要であることは変わらないと思う。その意味で，講演者のお話の中で「取り組み甲斐のある課題を出せるかどうか」というお話があったが，生成ＡＩの活用の可能性，効果的だと思われる課題についてご教示いただきたい。

【回答（講演者）】

テクノロジーが発展し，世の中がどんどん変わっているからこそ，変わらないことに着目することが大事。変わらないのはおそらくコミュニケーションの形態で，発信者と受信者がいて，どんなツールを中に通すかはわからないが，「メッセージを伝え合う」という活動そのものは今後も変わらないと思う。であるとすれば，私たちがどんなメッセージを持って相手に伝えるかという原型を忘れないようにする必要があり，教育をそこに寄せていくことが大事になってくる。その意味で，いかに「我が事にできる課題を作れるか」に尽きると思う。学習者自身が自分にとって本当に意味があると感じるような課題であれば，学習者はやるはずで，自分が本質的にコミュニケーションをしているという実感が持てるような課題であることが望ましいと思う。もちろんやらない学習者もいるとは思うが，少なくとも取り組まないことが「恥ずかしい」と感じるような，「一生懸命やって当然」「なんでやらないの？おかしいんじゃない？」といった空気にはなると思っている。私たちは，それがプロジェクト型の学習かなと思い，それに取り組んでいる。とはいえ，もちろんうまくいかないことも多い。プロジェクト型といえども，プロジェクトのためのプロジェクトというか，まとめやすいからとか，どうしても調べ学習みたいなもので終わってしまうこともあり，悩ましい問題も抱えている。何とか学習者の「自分自身」に連動するようなものができないかと日々悩んでいる

し，それができる限りにおいては，ツールというのは，能力を覚醒させてくれると思う。そうでなければ，楽なようにズルして使ってしまうことはあるのかなとも思う。

4. 分科会のふりかえり

本節では，二名の登壇者（講演者，討論者）とコーディネーター（住田哲郎）が分科会のふりかえりを行う。以下に示すのは，分科会開催の3か月後に分科会での議論を振り返りそれぞれがまとめたふりかえりの記述である。

4. 1. 講演者のふりかえり

生成AIはここ1年強で確かに社会にも，教育にも激震を与えたが，今現在の私たちはもはやそれには驚かなくなってきた。大した順応性だと思うが，それは生成AIが必ずしも薔薇色の未来を私たちに約束してくれるものではなく，全知全能の最強ツールとして，私たちの教育のあり方を根こそぎ変えるかといったら必ずしもそうではないことが分かってきたからでもあろう。生成AIに得意なところがあるのは確かであるが，一方で不得意なところも未だ健在である。とは言え，今後凄まじいスピードでアップデートされ，同時に改良もされていくと思われるが，新しい教育のあり方を考える時間的猶予ぐらいは，幸いにも私たちに残されているようである。

一方，こうしたAIとの共存や，生成AIをうまく利活用し，その恩恵にあやかるべきだという考え方に対しては，日に日に説得力が増しているようにも思う。結局生成AIは教師もクビにしなかったし，教室も消し去りはしなかったが，闇雲に毛嫌いし，反対することはどう考えてもおかしい。今後はこうした取り組みに国家的な予算もつけられ，教材や教授法も充実してくるに違いない。私はあくまでそうした動きに対し，楽観的でいたい。

最後に，こうした目まぐるしく変わり，場合によっては抜本的なゲーム・チェンジャーとなりうる生成AIに対し，私たち教育関係者が持つべき「マインド」たるものについて言及しておきたい。かつて福澤諭吉は，己の人生を振り返って次のような言葉を残している。

「一身にして二生を経る」

詳しい説明は省くが，江戸時代における下級武士として生きた後に，明治維新以後の知識人として生きた福澤は，確かにあたかも一つの人生で二つの人生を生きたかのようである。抗えきれない怒涛の社会変化に翻弄された人生であるとも言えるが，肝心な点は，そうした変化に生きた自身の人生を，福澤は実に誇らしく語っていることである。一つの人生で，二つ分の人生を生きることができた，あたかも随分と自分の人生は得であったと思っていたことであろう。

生成AIは，これまでの当たり前にことごとくメスを入れ，しかもその変化の波が次から次へとやってくる。せっかく学んだ知識も翌日には陳腐化していることを私自身も経験した。しかしそうした怒涛の変化に対し，私たちが一方的な虚しさをただ感じるか，あるいはそうした変化に興奮や感動を感じられるかの違いは大きい。教育者として，私たちがどういう心持ちで変化に対峙するべきか，私たち自身の姿勢が問われている。

4. 2. 指定討論者のふりかえり

当日の議論を踏まえ，技術のあり方を知ろうとすること，また，教育現場における使用の可能性に積極的に目を向け，試行錯誤していくことが重要なのだと実感した。また，その後，教師には，生成ＡＩを認めるか否かという二項対立的な問いではなく，何を代替させることができ，言語教育や言語学習の

あり方がどのように変化するのかについてより深く理解しようとする姿勢が求められるのだと考えるようになった。発題の中で指摘したように，日本語教育においては長らく，日本語で日本語を教える教授方法にその専門性が重ねられてきた。柳瀬（2022）によれば，生成ＡＩは単一言語主義（monolingualism）的なあり方から，複言語主義的なあり方へと言語教育を移行させるものであり，特にリーディングとライティングにおいて言語ゲームの多様性を導くものであるという。日本国内の日本語教育の文脈で言えば，教室に集まる学習者の母語が異なるという実際的な理由のもと日本語のみで授業運営が行われることが通常であり，学習者に対しても日本語を使って日本語を理解することを推奨する風土があるように思われる。しかし実際にはその構造においてこそ，単一言語主義的，母語話者至上主義的な教育環境が正当化されていることは，それほど意識されていないように思われる。自分自身，レポートや論文指導の場で母語話者教師として学習者の日本語と対峙するとき，有無を言わさず相手を自分のルールに従わせているような感覚に襲われる時がある。生成ＡＩの積極的活用は，学習者を日本語ユーザーとしてエンパワメントするものであり，複言語・複文化主義の理念と教育実践の間にある現実的なギャップを埋めるものになりえるのではないか。今後，言語学習の変化から自身の教師としての言語教育観がどのように変化していくのか，その不確実性を楽しむ力量が教師には求められているのだろう。

4. 3. コーディネーターのふりかえり

生成AIの進化により言語教育の領域では「できる」ことの幅が格段に広がった。生成AIを活用することで，以前は高度な言語運用能力を必要としたタスクも，今では運用能力がそれほど高くなくても達成できるようになった。この変化は教育現場に大きな影響を与えつつあるが，その影響のあり方については慎重に検討を重ねる必要がある。

これは私見であるが，言語文化教育の本質的なゴールは，学習者がさまざまな文化事象に触れて自らの琴線を磨き，自分の言葉で自由に自己表現や他者との対話ができるようになることにあると考える。そのためには単なる言語運用能力の向上に限らず，異文化理解やコミュニケーションスキルの育成を含む総合的な教育が必要となるが，一方で学習者の深いコミットメントや身体性を伴う体験も不可欠である。生成AIがこの一連のプロセスにいかに寄与し得るかが大きな課題となっているわけだが，AIの力を借りて「できる」ことが増えるという現在の状況は，学習者が表面的な達成感に満足し，深い学びを追求しなくなる危険性も伴う。AIが提供する便利さに依存しすぎると本来の学びの目的である深い相互理解や対話能力の育成が疎かになる恐れがあり，現代社会において極めて深刻な事態を招きかねない状況にあることを，我々は忘れてはならない。

AIによる自動翻訳は，異文化間のコミュニケーションを容易にする一方で，言語間の微妙なニュアンスや文化的背景を理解する能力の育成を妨げる可能性がある。確かにAIが生成する文章や翻訳は非常に高度ではあるものの，利用者側がその背後にある文化的コンテクストを理解しないまま使用してしまうと，誤解やコミュニケーションの断絶を招くリスクもある。したがって，教師は生成AIを言語文化教育の補助的なツールとして位置づけ，その利用方法と教育企画を慎重に設計する必要があり，AIの技術を活用しつつも学生が主体的に学び，深い理解を追求できる教育環境を整えることが求められる。AIは学習者のニーズに合わせた個別最適化された学習体験を提供する可能性を秘めているが，一方で教師には高度な“バランス感覚”が求められる時代になったとも言える。

繰り返しになるが，生成AIの進化は言語文化教育

に新たな可能性をもたらす反面，その活用には慎重な配慮が必要である。教育の本質を見失わず，技術を適切に取り入れることで，学生が深い学びを体験し，グローバルな広い視野を持つ人材へと成長することが期待される。教師と学生が共に学び続ける姿勢を失わず，技術の進歩に相応しい人間としてより良い社会の構築に貢献していきたいものである。

5. 今後の課題

生成AI技術の急速な進化に伴い，言語文化教育の在り方も今後は大きく変わると推測される。最後に分科会での議論を踏まえ，今後着目すべき項目についてまとめる。

まず，「教師の役割の再定義」についてである。生成AIの導入により，教員は従来の知識伝達者から，学習デザイナーやメンターとしての役割が求められるようになると思われる。この変化に対応するためには，教員自身の発想の転換が不可欠である。特に，AIが生成する情報の精査や倫理的な使用方法を教員がしっかりと理解し，学生に指導できる体制を整えることが喫緊の課題になるだろう。

次に「学生に対する自律学習の支援のあり方」についてである。生成AIを活用した自律学習は，学生個々のペースやニーズに応じた学びの提供を可能とするが，同時に学生のモチベーションや自律性の確保が課題となる。AIを補完する形で，学習意欲を引き出すためのインセンティブ設計や，学習コミュニティの構築が必要になると思われる。教員は学生の進捗をモニタリングし，必要に応じて適切なフィードバックやサポートを提供することが求められる。

三点目は「文化的背景や文脈理解の深化」についてである。特に言語文化教育においては，単なる言語の習得にとどまらず，文化的背景や文脈の理解が不可欠である。生成AIによる学習は効率的である一方で，文化的ニュアンスや歴史的背景の深い理解には限界があるため，教員が文化的コンテキストを補完し，学生がより深い理解を得るための教育企画を積極的に導入することが重要であると思われる。

四点目として「AI技術の進化に応じた教育環境の整備の必要性」を挙げる。AI技術の導入により，学習内容や方法が急速に変化する中で，AIを活用した学習ツールや教材の開発，実践的なプロジェクトベースの学習の導入など，教育企画もこれに応じて迅速に適応させることが求められることになるはずだ。また，多様な学生のニーズに応じた支援体制の整備も重要であり，生成AIを活用することで，個別化された学習が可能となる一方で，生成ＡＩにアクセスできない学生や特別な支援を必要とする学生に対しても，平等な教育機会を提供するためのインフラ整備も必要になる。

最後に「生成AIの利用に伴う倫理的・社会的課題」にも注意が必要であることを指摘しておきたい。AIが生成するコンテンツの信頼性，プライバシーの保護，バイアスの排除など，技術の倫理的使用に関するガイドラインの策定とその徹底が不可欠である。

以上のような課題に取り組むことで，生成AIを適切に活用し，学生のグローバルな視点を育む教育環境を構築しなければならない。今後も，技術の進歩に対応しつつ，言語文化教育の質を向上させるための努力を続けることが求められる。

文献

長嶺寿宜（2014）．言語教師認知研究の最近の動向．笹島茂，西野孝子，江原美明，長嶺寿宜（編）『言語教師認知の動向』（pp. 16-32）開拓社．

松尾睦（2006）．『経験からの学習 ── プロフェッショナルへの成長プロセス』同文館出版．

柳瀬陽介（2022）．機械翻訳が問い直す知性・言語・言語教育 ── サイボーグ・言語ゲーム・複言

語主義『外国語教育メディア学会関東支部研究紀要』7, 1-18. https://doi.org/10.24781/letkj.7.0_1

山中司，牛窪隆太，住田哲郎（2024）.「第 5 分科会：ことばの教育はいかに変わる“べき”か」『第 29 回 FD フォーラム報告集――DX・AX 時代の高等教育のゆくえ』（pp. 85-100）大学コンソーシアム京都. https://www.consortium.or.jp/wp-content/uploads/fd/66248/29thfdf-bunnkakai05.pdf

http://alce.jp/journal/ vol. 22 (2024) pp. 273 - 285 ISSN : 2188-9600

Studies of Language and Cultural Education SLCE 言語文化教育研究 発行・編集 言語文化教育研究学会 ALCE Association for Language and Cultural Education

Forum

Rethinking language and cultural education in the age of generative AI:

Exploring new approaches and challenges

SUMIDA, Tetsuro*
Kyoto Seika University, Japan

YAMANAKA, Tsukasa
Ritsumeikan University, Kyoto, Japan

USHIKUBO, Ryuta
Toyo University, Tokyo, Japan

Abstract

This paper provides an overview of the discussions held during Subcommittee 5, titled "How *Should* Language Education Evolve?" at the 29th FD Forum hosted by The Consortium of Universities in Kyoto, in February 2024, and examines the future directions and challenges of language and cultural education. Language and cultural education are essential for fostering intercultural understanding and a global perspective, but with the evolution of generative AI, educational methods are undergoing significant transformation. For instance, AI-driven automatic translation and language generation are enabling personalized education without relying on traditional teaching methods. In the discussions, experts in English education and Japanese language education debated the potential and risks of educational tools provided by generative AI. During the Q&A session with the general participants, they exchanged their opinions on topics such as evaluation/assessment, the role of teachers, and the impacts of using AI tools. This paper first presents a record of the discussions. It then describes reflections from each of the two experts and the coordinator, conducted three months after the forum. Finally, the coordinator offers an overall summary and highlights issues related to the integration of generative AI into language and cultural education.

Keywords: role of teachers, self-directed learning, educational environment, learning tool, evaluation/assessment

Copyright © 2024 by Association for Language and Cultural Education

* *E-mail:* tetsurosumida@gmail.com